慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに：「論理と感性の先端的教育研究拠点」
Sub Title	
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	活動報告書 Vol.5, (2011.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20120300--002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

「論理と感性の先端的教育研究拠点」

本 GCOE プログラムは「論理と感性」の先端的教育研究の拠点形成を行うためのものである。23年度はプログラム最終年度にあたるが、ほぼ予定通りの拠点が完成した。拠点に関係した多くの方々に心より御礼申し上げる。ヒトの判断には論理的アルゴリズムによる合理的判断と感性や情動による直観的判断がある。両者の関係には認識論の古くからの課題であるが、近年の認知科学、神経科学の発展は、判断における論理と感性がひとつの系として、ある時は相互補完的に、ある時は対立的に働いていることを示しつつある。論理や感性のプロセスは必ずしも意識化できる過程ではない。言語や文化による制約も大きい。本拠点では、判断における論理と感性の統合を、もっとも基礎にある生物学的レベルから文化レベルまで、統合的に理解しようとするものである。

目的：研究と教育

具体的には、１）論理判断は系統発生的にどのように発生したのか、２）脳内機構としては論理と感性はどのような系を構成しているか、３）その遺伝と発達的変化はなにか、４）論理・情報学的には論理と感性の相互作用はどのように表現できるか、５）どのような文化的制約があるのか、という５点を明らかにする。

論理と感性の解明は分野融合的な研究にならざるをえない。この研究に参加することを通じて実験科学的技法をもった人文研究者、人文科学的な知性を身につけた実験研究者を育成し国際社会に送り出すことが本拠点の教育的目標である。また、心の問題は現代社会におけるもっとも緊急に解決しなければならない課題のひとつであり、本拠点ではそのような問題の解明に対応できる深い知識、幅広い視野、国際レベルの先端的技術を併せ持った研究者を育成する仕組みを作った。

教育研究体制

論理と感性の教育研究の中心に以下の５班からなる「教育研究プログラム」を設置し、国内、海外の連携拠点と密接な共同教育研究を行った。

１）脳と進化班：チームリーダー　渡辺茂

２）遺伝と発達班：チームリーダー　山本淳一

３）言語と認知班：チームリーダー　クリストファー・タンクレディ

４）哲学・文化人類学班：チームリーダー　樽井正義、宮坂敬造

５）論理・情報班：チームリーダー　岡田光弘

これらの班の活動は大学院生の履修科目となっており、大学院生は研究参加による単位履修ができると同時に自分の専攻以外の様々な知識・技術を習得することが可能になる。

教育研究の実施を支えるのが「研究施設」（脳研究施設、動物実験施設など）である。21世紀 COE プログラムでは、脳研究のために脳波計、光トポグラフィ（NIRS）、経頭蓋磁気刺激装置（TMS）を導入したが、本拠点のテーマである感性系の研究には皮質下の機能測定が必須であり、３テスラ MRI を導入した。人文科学の拠点にこのような機器が必要なのかという声もあるが、最新脳科学で武装した人文拠点こそが新時代の文理融合的な教育研究拠点の姿なのである。その意味で、本拠点は新しい時代の先端的教育研究拠点の象徴的存在といっていい。また、医学部、理化学研究所と共同でマーモセット高次認知研究施設を設立するとともに、つくば市に動物野外研究施設も設置し、系統発生的研究を多角的に行えるようにした。

若手研究者の国際化支援

本拠点では若手研究者の育成のために「研究成果発信支援・評価プログラム」を設置し、若手研究者の国外での研究発表の効果的な成果発信を支援した。アカデミックライティングの講座、個別論文作成の指導から、海外の第一線で活動するための戦略指導まで行った。現在ケンブリッジ大学、ウイーン大学、ビーレフェルト大学、エコル・ノルマル・シュペリユール、マッギル大学、南フロリダ大学、嘉泉大学・神経科学研究所、と提携関係を締結し、そこからは８名の研究者が事業推進担当者として本拠点に参加した。海外連携拠点と協力して若手研究者が「国際教育研究プログラム」として Keio-Gachon joint seminar（韓国）, Keio-USF joint seminar（米国）を実施した。これらの国際化の仕組みは参加者からも相手校からも高く評価されており、今後持続的に運営されれば国際発信力のある若手研究者が続けて育成されるであろう。

運営体制

運営は拠点リーダーを中心に、社会学研究科委員長、文学研究科委員長からなる幹事会が日常の運営を行う。今年度は委員長の交代があったが、残任期間が半年なので幹事交代は行わなかった。幹事会の下に「教育研究プログラム委員会」、「教育研究施設委員会」、「研究成果発信支援・プログラム委員会」、「国際教育研究プログラム委員会」、「広報委員会」、「倫理委員会」、「施設維持検討委員会」の各責任者からなる拠点運営委員会があり、各責任者は随時当該部門の委員会を開催した。なお、これとは別に外部の委員を含めた「外部評価委員」を設けており、2008年にヒアリングによる評価を受けたが、今年度は文書による最終評価を受けた。

拠点リーダー：渡辺　茂